

## 第2回目 感想

\* 環境情報学府 環境イノベーションマネジメント専攻 D1

### 【3限目 酒井暁子 先生の講演】

学生時代からの苦難の道のりが生々しく語られ、長期間定職に就けなかった精神的なプレッシャーは並大抵のものではなかったのではないかと感じました。また、公募研究に次々応募され 43 回目にして科研費審査が通ったもののさらに苦難が待ち受け、申請を認めてもらうまで諦めずに策を講じた行動力と粘り強さには脱帽で、大変勉強になりました。一方、ご主人に論文の書き方などを指導してもらえたことや、農水省試験場や東北大学でのポストを得られるなど、変化が激しく厳しい研究環境の中でも、様々なチャンスをうまく掴み、キャリアの転機に生かされていると感じました。

プレゼン資料の中で、ポスドクの戦略についてお話が大変興味深かったです。大学とは異なり企業や研究所の場合は、仕事の力点（横軸）として「個人の業績」と「組織の成功」のバランスがより難しい状況であるものの、個人と組織が共に Win-Win になる状況を目指すことには変わりなく、早い段階からそのような視点を磨くことは重要と感じました。また、コミュニケーション（縦軸）に関しては、個人の性格や気質的な面が大きく関わりますが、周囲との信頼関係を構築することや、メンターを複数確保することの重要性は身にしみて感じていたため、大変共感する内容でした。

### 【4限目 竹田陽子 先生の講演】

問題意識を強く持つことや、ハングリー精神旺盛で自分のやりたい研究をとことん突きつめて継続されている意識や姿勢は大変学ぶべきことが多く、自分自身に確固たる自信を持てるだけの土台を築かれており、並外れて芯の強い方であると感じました。一旦ゴールを明確にすると、それに至る最も効率的な戦略を練って確実に実践していくという先生のプロセスは、様々な場面で適用可能であると感じました（誰もが同じようにできるかどうかは別として…。「論文が音楽のように聞こえるようになる」という状態に少しでも近づきたいと思いました。

「研究は社会からさせて頂いている贅沢」という、講演タイトルにも繋がる「贅沢」というキーワードに関しては、ちょっと分かりにくい点もありました。最近、学術論文の数などのアウトプットによる貢献だけではなく、実社会での適用や実用化といったアウトカムが研究者にも求められている時代になってきており、研究計画段階でアウトカムまでの見通しがないと申請が通らない場合や、研究費が削られ、理解が得られない事例が増えてきています。竹田先生のご研究分野は、まさに実社会に貢献できる分野で十分アウトカムがあるため、研究を「贅沢」という言葉で表現される点にやや違和感がありました。自分がやりたい研究と、その社会への貢献をいかに繋げるか、そのプロセスで自分の良いところを伸ばしていくことが重要であると考えます。

\* 環境情報学府 環境イノベーションマネジメント専攻 D2

担当 竹田先生

竹田先生のこれまで研究者としての生き方や働き方についてのお話がとても参考になりました。私自身子育てをしながら、研究を進めている中で心が折れそうになることもあります。竹田先生のように常に前向きに生きていきたいなと思いました。家庭と仕事を両立させるには、周囲の協力は欠かせません。そういった部分でもとても参考になる講義内容でした。

\* 環境情報学府 環境イノベーションマネジメント専攻 D2

酒井先生のお話

研究者として常勤職を得るまでの、様々なご努力、また困難について、私たち院生と同じ目線でお話くださった。職場、職種の具体名についてまでもご提示くださり、酒井先生がこれまで歩んでこられた道を詳細に知ることができ、大変参考になった。とりわけ、現在のポストを得るまでにかかった年数、求職の状況についても実数を示してくださったことにより、現実を知ることができたように思う。研究職として食べていけるようになるまでの話として大変有意義であった。

竹田先生のお話

竹田先生もまた、研究職につくまでのご経歴を詳しくお話し下さり、大変参考になった。竹田先生のお話でとりわけ印象深かったことは、職歴とはまた別のところにある、本来の研究能力についてのトピックであった。自らの研究能力の成長の過程についてのお話は、よく理解できたように思われると同時に、自分の今後へのある種の道しるべともなると感じた。

お二人の先生方のお話を伺えたことは、今後博士課程の学生として研究を続けるうえで力となる、有意義なものであった。

\* 環境情報学府 環境リスクマネジメント専攻 D1

酒井暁子先生：植物生態学研究者からのメッセージ

幼少の頃のお話から大学院時代からの研究内容、指導教授との師弟関係などザックバランにお話くださり、とても親しみを覚えました。

先生のご主人も研究者であり、学校以外のごく身近な環境に師匠となる方がおられ、研究と私生活のバランスを上手く保たれていることが良い研究につながるのだと感じました。また、先生の分野は山歩きが必須ですが、男性研究者と同等な実地研究をしていることも尊敬をいたします。

そして、研究に大切なこととして、理論的な思考力を持つことで、きちんとした文章を書く訓練

を行うことが大切であることも学びました。

竹田陽子先生：経営学研究者からのメッセージ

竹田先生は、一度社会に出られ、ふたたび学術の世界に身を置かれたご経験をお話くださり、まさに聞いてみたい内容でしたので、たいへん興味深かったです。

特に、子育てをしながら研究を続ける際に重要なこととして、周りの人とのコミュニケーションをあげておられ、人との付き合い方の重要性も改めて、考える機会をいただきました。昨今、人とのつながりが断絶された世の中になったと、よく耳にしますが、周囲の方の協力を得ることが、自分のためだけでなく、周囲の方への影響にもプラスに働くことになると思いました。

そして、印象的な言葉として、「仕方がないとは思わないこと」

- ① 出来ない理由を考える人は、出来ない理由がなくても出来ない。
- ② 他人の環境を羨む人はその人と同じ環境にあっても出来ない。

です。たいへん説得力があり、心に響きました。

また、「研究は社会からさせていただいている贅沢である」業績をあげるための研究は無駄である。このお言葉もたいへん印象的でした。